

---

## 取組事例 8 : 明治乳業株式会社

### 省エネ取組は広い視野で協働による地道な取組と普及・啓発から ～コスト削減と物流品質の向上を念頭に置いた省エネ取組の推進～

---

#### 御社の物流の現状を教えてください。

当社（グループ会社を含まない）での物流量は、およそ10億トンキロ/年となり、特定荷主に該当します。当社の国内の生産拠点は23か所あります。また、国内グループ会社は32社あり、このうち輸配送事業者のグループ会社が1社あります。

輸送機関別では、およそ船舶による輸送が18%、鉄道による輸送が6%で、残りがトラックによる輸送となっています。

当社の輸配送業務は、基本的にはグループ会社の輸配送事業者に委託していますが、多くは協力会社（庸車）にお願いしています。当社の主力である牛乳乳製品（市乳）の配車などの管理業務については、東西の生産拠点（市乳工場）に置かれているLC（ロジスティックセンター）が、受注データをもとに生産計画、資材の調達と併せて管理しています。これは、生データを常に把握できるところが集中管理を行うことによって、コストを最小限に抑えることができるという考え方に立っています。

#### 御社の省エネ法対応の考え方と取組の位置づけを教えてください。

当社では、省エネ法対応以前から、様々なCO2排出量の削減を念頭に置いた活動をしてきています。従って、省エネ法対応のために新たな取組を行うというよりは、これまでの取組を引き続き継続させていくということになります。なお、省エネ法に対応するにあたっては、エネルギー消費量に係るデータの把握と集計が必要になりますが、データ把握と集計が目的ではなく、取組の目的はあくまでCO2排出量の削減であるということを念頭に置いて取組を進めています。

#### エネルギー使用量算定の考え方について教えてください。

当社が省エネ法の算定対象とする範囲は次の2点としています。

- 1) 全製品の社内転送（当社では保転と称しています）と出荷
- 2) パレット等の回転容器の回収

当社のエネルギー使用量算定方法は、主として燃費法を採用しています。

#### 御社の取組について、概要を教えてください。

当社における取組は、グループ内、お取引様との協力、お客様との協力、同業他社様との協力など多岐に渡っています。

グループ内では、配送コースの見直しとミルクランの活用を進めるとともに、社内LANの活用によるリバースロジスティクス（静脈物流）の構築に取り組んでいるほか、製品物流とリバースロジスティクスの結合として、製品、回転容器の組合せによる帰り荷の確保を行っています。モーダルシフトについては、北海道と本州、関西と九州との間で船舶を、九州と静岡との間で鉄道をそれぞれ利用しています。また、トラックについてはエコドライブの普及を進めており、グループ会社（13社）により構成されるエコドライブ推進委員会の定期開催と啓蒙活動を行っています。

お取引様との協力については、調達物流が該当しますが、原料メーカー様との協働によるトラック便の活用を行っています。また、お客様との協力については、小ロット注文の集約による曜日配送を行っています。さらに、同業他社様との協力については、同一倉庫からの共同配送を行っています。

## 御社の取組のポイントは、どこにありますか。

ここでは特に「エコドライブの推進」と「社内LANの活用によるリバースロジスティックスの構築」についてご紹介します。

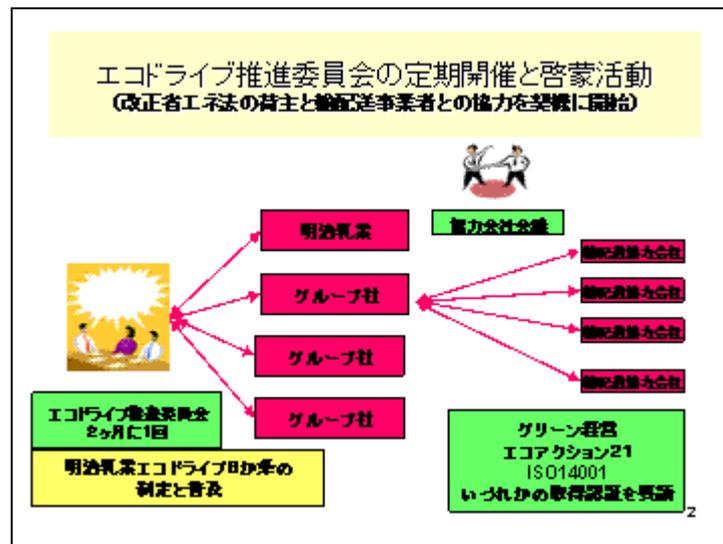
### 【エコドライブの推進】

当社グループ輸配送事業者2社では、省エネ法対応に取り組む前からエコドライブの推進を行ってまいりました。エコドライブはドライバー自らが取り組むものであり即効性が期待できること、燃料消費量の削減だけでなく安全運転との関わりも非常に密接であることから従業員の意識・啓蒙といった教育的な効果も期待できるということで、積極的に推進をしてきました。

省エネ法では、荷主と輸配送事業者との協力がポイントの一つとなることから、これを契機にグループとしての取組体制を強化しました。具体的には、当社とグループ会社から成るエコドライブ推進委員会を定期的で開催し、明治乳業エコドライブ8か条の制定を行うとともに、これを各グループ会社が委託している輸配送事業者（協力会社）に対して協力会社会議を通じて普及させていくとともに、協力会社にはグリーン経営認証、エコアクション21、ISO14001のいずれかの認証取得を要請するなどしました。

現在では工場やデポ間の輸送を主に請けている車両については、全体の6割以上の車両に車載器を搭載しており、GPSによる運行管理を行っています。

(エコドライブ推進委員会の定期開催と啓蒙活動のイメージ)





---

## 社外との連携は、どのように進めていますか。

先に述べましたとおり、当社が進めている取組を継続的に実施していくためには、お取引先様、お客様、同業他社様との協力が不可欠です。例えば、エコドライブの推進に当たっては、元請けとなるグループ内の輸配送事業者を通じて、実際にハンドルを握るドライバーが所属する輸配送事業者の協力が無くてはできません。原料メーカー様との協働についても、部分的に見れば輸送距離が伸びてしまうケースもあり、原料メーカー様の理解が無ければ取り組むことができません。しかしどのような取組を実施するに当たっても、コストの削減と物流品質の向上という共通の目標のもと、取組の意義を理解して頂きながら進めています。

## 取組の効果はどの程度あがっていますか。

取組の効果という点では、認識の改善として現れていると考えています。例えば、「エコドライブの普及」については安全運転と密接な関係にあるので、エネルギー使用量の削減だけでなく事故率の低減及び物流品質の向上を図ることができると考えています。さらにエコドライブ推進委員会もまだ拡大しつつあると共に、狭義のエコドライブ（ドライビングテクニックや日常点検に限定されたもの）から広義のエコドライブ（狭義のエコドライブに加え、配送実務担当者の視点で捉えたトラックの走行距離の削減、積載効率の向上等を目指す提案も効率化会議の議題に取り上げる）運動へステップアップする試みも開始されました。ロジスティク分野には直接関わりがありませんが、全社的にライトバン等の自家用車のエコドライブも本格的に開始しました。

また、「社内LANの活用によるリバースロジスティックスの構築」については、開始当初はあまり浸透していませんでしたが、取組を進めていく中でその効果が認識され、今ではほとんどの回転容器の在庫情報について確認できる水準となりました。その結果、新規に購入する回転容器の数が大幅に削減することができました。

回転容器単回収車削減台数	30%削減
パレット新規投入数	30%削減
クレート新規投入数	15%削減

## 取組の中で見えてきた課題、その解決法について教えてください。

当社ではいろいろな取組を並行して進めてきていますが、その中で感じていることとして、それぞれの取組が最終的に目指している方向が同じベクトルを向いているかということです。ある個別の取組だけを見ると効果を発揮しているように見えるかもしれませんが、全体を見渡してみたときにかえってマイナスになっていないかなど、総合的に判断する必要性を感じています。

また、様々な取組は社外との連携が必要不可欠ですが、そういった取組に当たっては、自己主張しすぎず、お互いにパートナーシップを発揮し発展的に対応することが肝要だと思えます。

## 最後に、読者に対するメッセージは何かありますか。

環境への取組を進めていくに当たっては、断片的な視点で物事を見るのではなく、常に総合的な視点で判断することが必要だと考えます。また、様々な主体で取組を進めていく中で、強く問題意識を共有し、積極的に連携して進めていく必要があると考えています。また、常にPDCAのサイクルで物事を見て、問題点を明らかにしその障害を乗り越え続けていくことが重要だと考えています。

---